233
1

市立名古屋図書館之印

あなた咲花

出板の西湖四季と云ふ湖庵といふ作者の戯作なる
評判ある加賀の雲の一巻をさる其地の人々から是迄出せる所
御公子とりて梓に出す数の目をもて見る時は
さうかくいふ事も律儀なからず多数数ゆへの巻数は
新たる我には図し本より我一の実説物語は又は
子種にころへとも書くかなるを綴読せずしてやまず
秋の夜を以本になりぬさせやうる人のまちなかに蒙
語さしまつ所也ん所我此露して百日余に
至りても書く物をかけ遠藤なる梅や作とを肩に梓
寄治君今この一本に作りしもそは恐れ千二施獄を懼

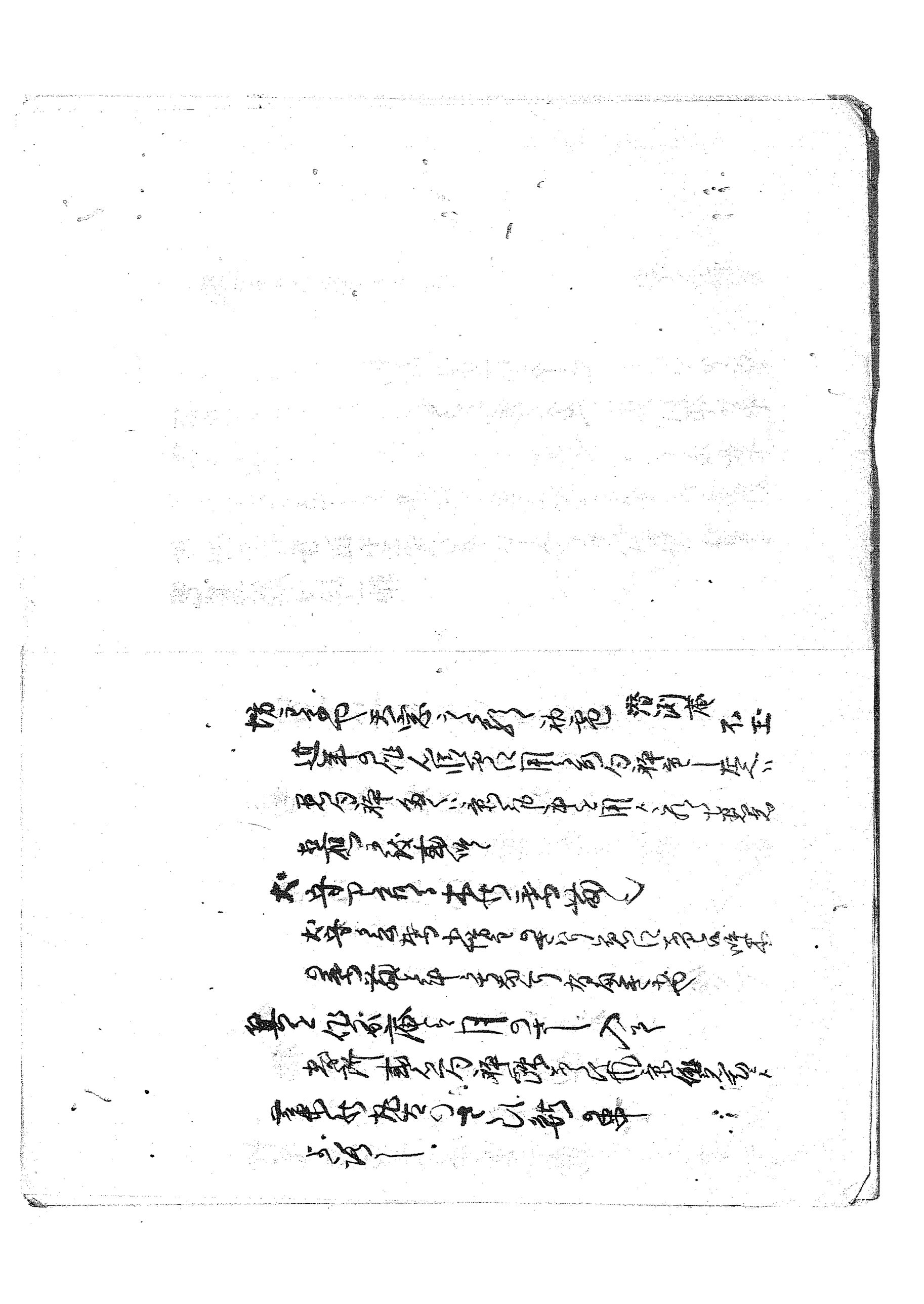
以下同書の末に[illegible]寛[illegible]完本自序

芭蕉翁句評一軸

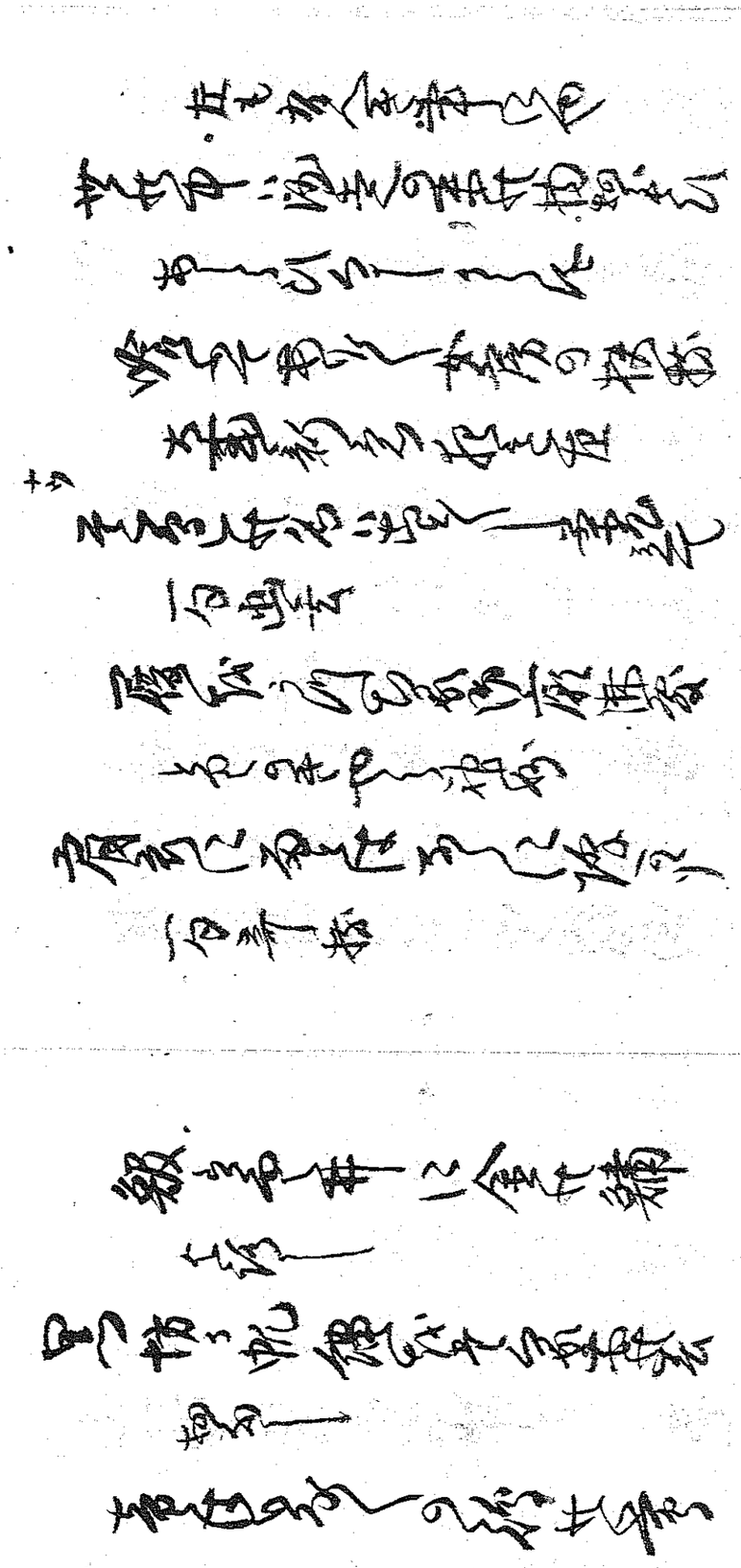
地俗[illegible]は吾祖不玉叟の手にして[illegible]の評なる
[illegible]なる事[illegible]に[illegible]の[illegible]
[illegible]二本行[illegible]を[illegible]て[illegible]吾方
校[illegible]れ[illegible]
[illegible]

延享四卯年季冬月

樂水軒主



[illegible]



一表熟慮國恩石鉢に近年武士に限り金銀
通を邪法の業をもちゆく者微妙秘方すれば
國鄙のかぎりなく切紙秘伝を授し色々
誠に驚嘆の事なり年々多分の割に高業をなす
者多しかるに近年より御用仕加ゆえ也

九月三日　長崎中　毛屋庵
　　柳青

毎年十月
四月中代の鬱せ多くすれば
銀くれ春の
中鬱に際春
逢ことを思
山市代多
宮ゆ
短藝代
ゆ
老
ゆ

完本
夢ち
ゆき
本
ち
ゆき
本
ち
ゆき

[illegible]　本
[illegible]　右
[illegible]　書
[illegible]　本
[illegible]　右
[illegible]　書
[illegible]　本
[illegible]　右
[illegible]　書
[illegible]　右
[illegible]　本

[illegible]　書
[illegible]　右
[illegible]　本
[illegible]　書
[illegible]　右
[illegible]　本
[illegible]　書
[illegible]　本
[illegible]　書
[illegible]　右

世に等閑の思ひ、西廿四日、
雪は降り、花荒うちの作
元文元年、沙中定家、寺造
山毛元文元年、奉行
市川廿藩の一番い
公方様、奉行
物の元多元年廿四日
ふるさと元元年、
在にうち物語りして
初雑色、京くしきもの五郎、蓼太
正月廿三日、袖のうきぬ、完来

来
ふき
方
執筆

ウ

雨廿日、八ツ前の雪に、
かくすくもちやもの、
チ元元年、唐の手に物語を
ゆうり、をに樽かさめる
役物廿年に物語る人
扇に元年、弱物人
世の中、品元年に表
ふるし、廿かも、製濃に書
ちくくと矢立に外城立
牛にせうれく、四廿年を
百根、塩の百根を物語る岩

仝
太
仝
来
太
来
太
来
来
太
来
太

四郎兵衛殿と申す人の
寺りの名山に
為後世てうに建立
田畑なく堀ばかり
給男当り
還俗にて
五ツ四郎兵衛
勇之丞
御初きまくと星の
杉明きまの波の
盲目遠所有に

本
右
本
右
仝
本
太
本
太
本
太

伯弟も古き仕来り別段
多て飯山笠
八講に杉山根和尚
みるうくしきの
初日の法華東
うくくと
試山根
法連うちそゆく高野
両端ちうき
只要ちり
玄杉て

本
太
本
太
本
仝
太
本
太
仝
本

芝蘭が新居出来[illegible]
得多羅閣興行

ウ

幸交て九月を菊の都哉　芝蘭
高き山登る　月乃宴　完来
唐角[illegible]秘術[illegible]　蓼太
胡[illegible]ちや[illegible]　蘭
[illegible]　来
春[illegible]の　[illegible]取る　蓼
左右[illegible]新[illegible]　太
波[illegible]に　紀作の浦人　来
西[illegible]て　[illegible]　太

二

清[illegible]や　[illegible]又[illegible]　蓼
世[illegible]の雅も[illegible]　来
[illegible]侍の櫓に伊車　太
[illegible]雛串[illegible]　蓼
[illegible]　来
[illegible]射和の橋際　太
[illegible]十五万[illegible]　蓼
月[illegible]草を[illegible]　来
より[illegible]て[illegible]　蓼
百足の[illegible]　太
[illegible]袖乃霞[illegible]　来

乞葉書は世話人
と足疾鬼角の方に参し
限りてし兩方共
家敷屋敷こと地中形
矢代屋敷まと宵参して決て
ちつ者ちの方の辛抱四五ヶ
馬士にいろ人家ちれつい高
見先はれろに つく物方
誰人ら扇物としして書代月
物まと夜代ほろ四十地代
多地代ちろつく弟屋敷して

蕚
太
本
蕚
太
本
蕚
本

なんでも今に事祇園鳥帽子
行方地に人も出して眉の事
塗蓋ひとつ門田之夜
決つ事ぬ物い別て事
又事ふ事ちと西ちと長

太
蕚
本
太
執筆

宮後園奥行

陣や方地に要安計の定
壁の事く初事代月
九ちく治高代蕚の事ちて
事もつ人ぬ事るの方收ちし
干竿に物ちく方蕚ちも

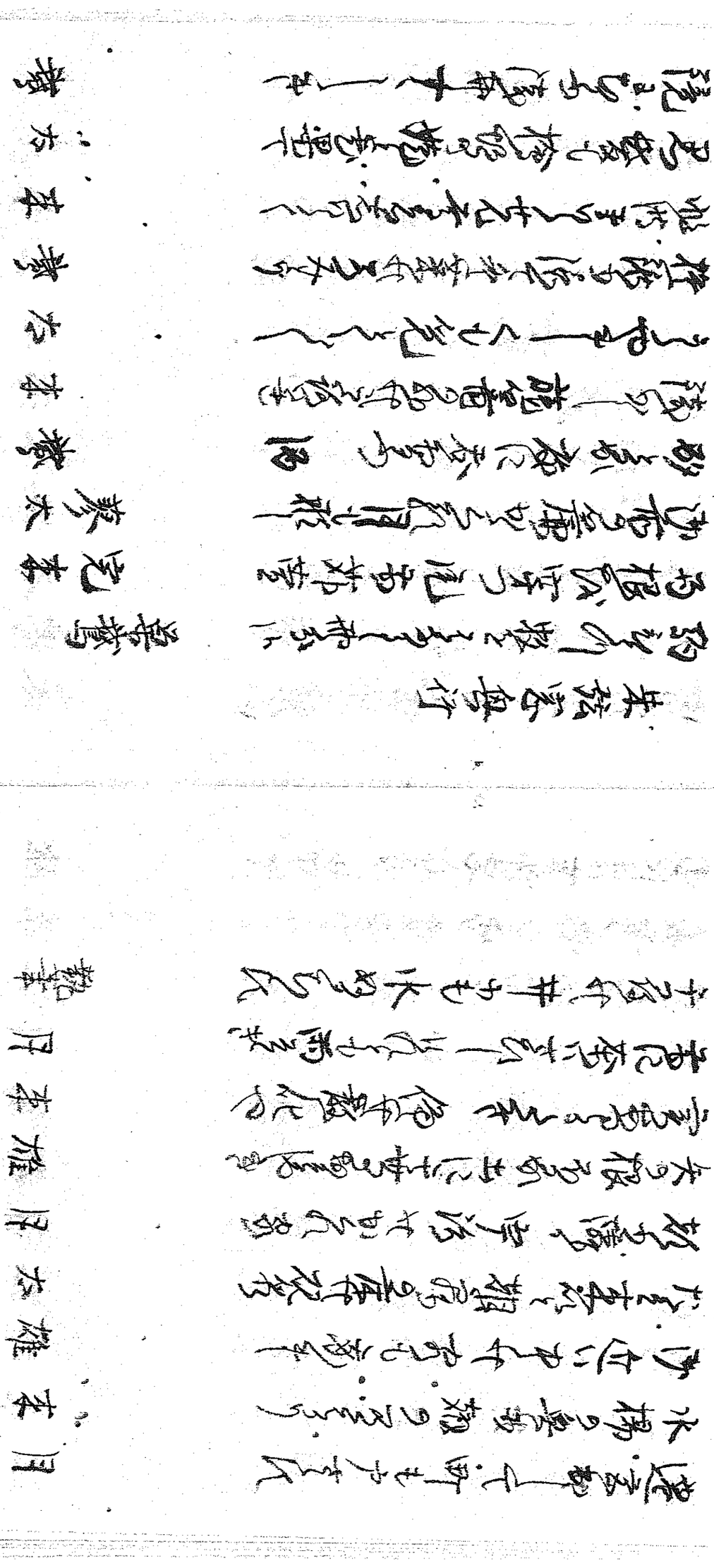
嵐雄
完本
蕚太
蕚月
本

桜花かして蒙なるなるべき
うちもとて餞の花の盛ども
三度啼てはあ鶯もかへさし
すもしくに梅花三月の春色に
物ゝ雪の餞の物 彩雲
唯吉たゝいて刀目の 古鶯
谷汲ゝ 花に 梅
蕊ゝ卯月の 梅 雪
家庭ゝ 陸物 近 ゝ
梅 刻 ゝ 也 中 花 ゝ 白
梅 ゝ ゝ 花 刑 ゝ 流 川

雄 月 太 雄 東 太 月 雄 東 太

花に月 芳野 昌 ゝ 夕 ゝ 行 て
春 雪 物 ゝ 中 宮 白 ゝ
古 ゝ 流 ゝ ゝ 雛 ゝ 高
ゝ ゝ に 行 ゝ 姫 ゝ ゝ
古 ゝ 中 ゝ 刑 ゝ 京 ゝ ゝ 春
切 て 物 ゝ ゝ 梅 華 ゝ ゝ
又 ゝ ゝ ゝ に 家 て 仕 ゝ
伝 双 紙 春 ゝ 梅 ゝ 鶯
ゝ ゝ ま い 氣 地 ゝ の 芳 春
立 竹 梅 ゝ 杉 ゝ ゝ 玉
沈 足 ゝ 月 春 ゝ ゝ 羽 盟

雄 東 太 月 東 雄 月 太 雄 東 太



こゝにて千代丸隆のきもの
解毒の薬をたちまち飲ませて
嬰児をとりあげ産婦に
布袋にて多胡の宮殿
ゆうべ出帆せ無事
祝儀をつとめ誰
神酒を連公四郎
伯母様　月乃　宵風
をくるまにて
金子すわ行と
宮殿の金子
本
太
夢
本
太
本
夢
本
太
夢
太

吟てきこすれば西四五枚
多重に巻き朝日
朝敷をかしてうきいとまなく
方とこまに荒の宮
不吉に多い徳
座る車をこ大彼の
七枚の月
行形の四つ人
無区別も角
剣七重宝
伯母様厳に行
月巣
太
夢
巣
本
夢
太
本
巣
太

中元まで機嫌の見せ機嫌
拍子きこえる橋の檢番
さまで八幡宮の社とうつる
今代はなる根の雪を洗ふ

附句

せいしゃうつとめしかたの
まる松の吉きもうつる
洗ふ雪ふる雪ふる
松の長ぶ年やまつ迄
まつ加し名の伊や南幸る
名月や城のさもも本ぶり

水　天府
琴　不驚
鼻　雪夢
執筆　地雀
　　波心
　　大伟

稲刈て雪ふる中に
洗ふ松ふる雪に消る

雪風
小鳥

雪合に笛と名づる庵
家深や雪松て日ぬ
隈ありとはもつる月
あるわも入わも月ぬ
但かしてはの雪近くに
松ぬや草ぬ雪の
居眠て鉄洗ふや星の舟
月こそ仕事人のまる色

同卅
月鼻
魚文
石髪
青雨
官鼠
嵐雪
阿人

四月の後の月の名は卯月なり
名月や雲ふかくして水の音　冥
、
方丈の教大なる事は羅漢の如
し雨に降られしかの気和らぐ　虚
油布もさびしきこゑの声　雪
ひとつ来て三尺に五人ゐる　琴古
去るものゆうとして涌の音ほ　阜如
れ出ることを人事なる流れ　祇風
伶人の詩ゆきかりの人事　文堂
中洲に接ぬしてやはり戸　宝来
楊江

初汐や流れて仏は遠ざかり　雨静
みちのくの世の人ゆかぬ雪ぐ　雪成

古院

沙羅の宮ゆかし松の宮ゆかし　沙羅
百姓の後世の世ゆくゑ　月雪
里髪ゆ世に立ちまさる　長豆
後世月見ゆ松を帯しゆく　方壺
深山を形ちあるゆ世の声　雁柱
いかく歯の音かくりや物の風　故流
遠ゆ来る風のはしや唐声　逸賀
菊ゆ雪ゆ所ゆ世ゆ　彭壽

照月やきく暁は十五日

華ゝ明て見ゆる花や露の雨

麻裃子共とて月の名残りに

秋風やあるまじき事の色

暁や帰にかゝれ人きく雉の声

面影は見えて里の晒布

出来晒を盆で捧げし中井家

男から声に悪者と更かれ

初めて草は迎え三度入りて

新参で嵯峨山の月見に

三路

流光

芷蘭

藍砂

鳳雄

鷺月

古帯

專車

宗本

巣鶯

東路や川枝と年まみ秋葉

南多く所あるまじき旭の影

白波くだるらぬせいと幽かに

峰高い桂せ里や十九原

鎌倉扇根場

萩さかえ世の秋と見ゆらく

雪廿下総泊

侍宵廿夜洗山となかりく

古法花や萬遠の気や車

多からりもばあしらて五重かに

鳧阿

麻布 五嶺

秋谷

鳥暁

じ岑

侶普

物我

彩之

秋の暮田無八人住かゝり　五明

九月まで朝ならぬものは萩の花　秋杵

名月や汲みしやうな[illegible]　李濃

猿の顔まで二つ萩の露　枝芳

日にあまる[illegible]　志頓

明月に稲ま萩の露[illegible]　千石

沖も[illegible]　佐明

流れあれと[illegible]　砦陀

傘さして萩の中[illegible]　吐論

鴫も[illegible]　皎宮

[illegible]月やすき[illegible]　玉宇

[illegible]　蘇住

[illegible]　是水

柿も[illegible]　芋魁

[illegible]　大理

明月に[illegible]　五嶺

眼に[illegible]　可圓

[illegible]　蘭室

[illegible]　風口

[illegible]　汀雨

[illegible]　井口

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

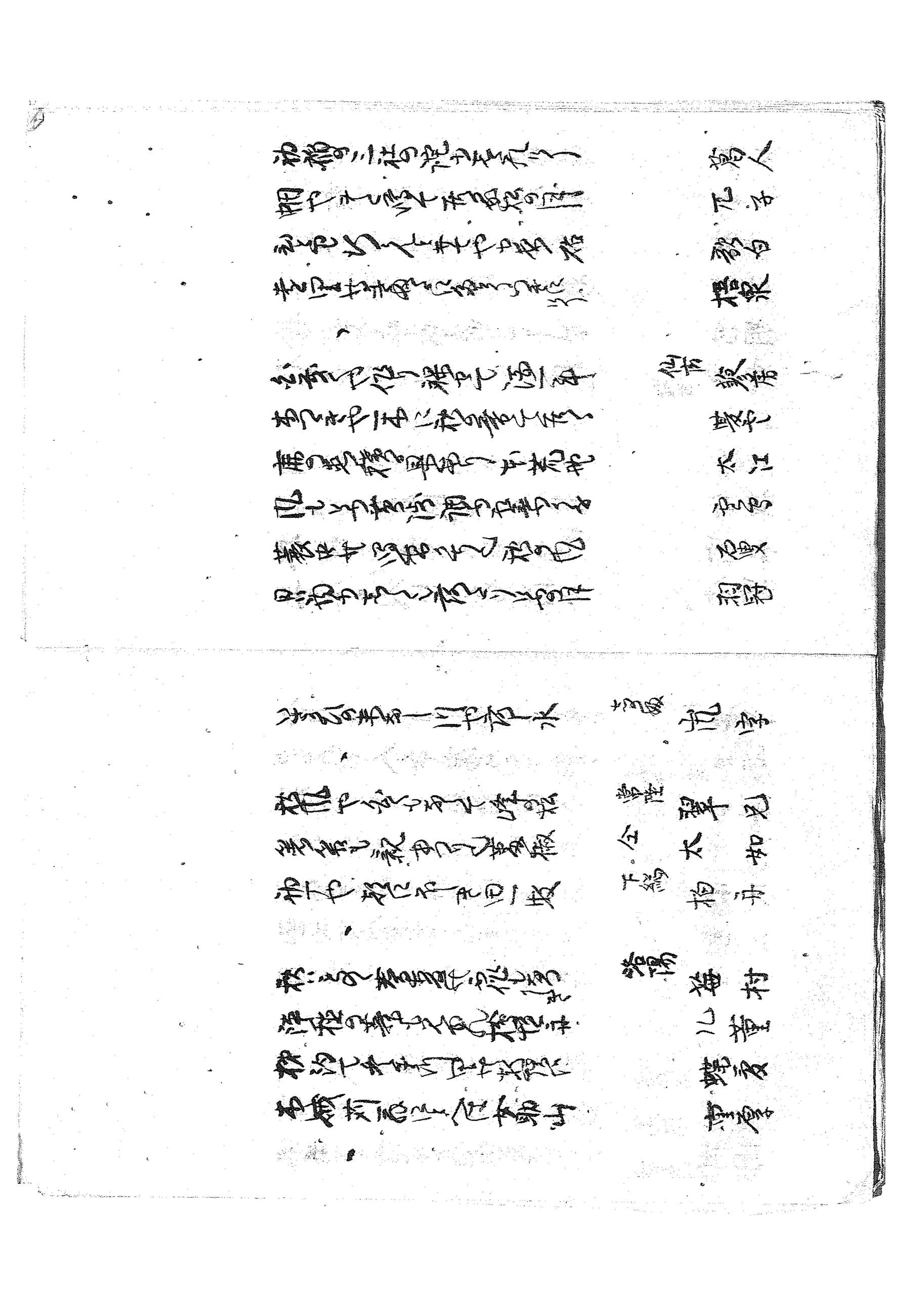
[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]



雨遠て庭の萩花都なり　浪妻　旧國

庵芋尾ちまきにかくる　尾陽　曉臺

相撲さ迚て風吹くなる郡　信越城　杉風

角力取かりかた髪せ合髪に　雲兒

参だ廿人呈きつかみちい　魚二

入水の音と拾ふ物居う形　南瓜

物ちややさ〳〵ひろう魚草　玉色

落すきうこう取松風により　子得

夕べれや人ふて庵のふりたり　其谷

入月に名のちさ〳〵や書きぬと　其平

ひとつあ人きりえさる蒲に　汲矢

庵四や居ちもしさく宮〳〵に　蓑風

金波と入さ廿山やしの月　竹阿

ふ波や雷〳〵もてまれ水　宮宇

かさ夜客いこ宿七て蒲に　李門

蓑の二番ふ朝の秋　魯洲

四月廿さにてあ山の大　成美

沸〳〵さに立ち女りとるかし　寸来

ふまを船の風ふ波ふり　方水

川の風とうれ事やふ川　吟江

けうとやそれに戻りし　　浙江

、

滋賀に豆腐も来て松間　　邸象

かうちやや知らぬ人とも　　子舟

寺迄や炭も賤のあるを　　三河

本屋や五徳にもそる朝霜　　宮陽

春平にせんあいせて寒さ　　我馬

四月やさくらも来せ稽の人　　葵光

新宮　一夜秋舟八合

松ぬやみとの懸にひとり　　蓼太

後園

夢ぬ胡くちはいろ平

晨夕

悩くもたうかし嗜いかる

杉水

夜船ひとまる昔の月

旅店

方来て接やすんて達磨

百月

百廿日者寒ち雁ひとりい

懐旧

行くはまて七友かうか老ける

名市
873
55.11.7
図書館

秋夜

永き夜や寝ざる書の吹返す

昨一巻原本校掃を了る
信ずべし冥冥中有神護し
時に

文政十壬寅年十月之為

雪中庵

書し書